

---

# 三国志疾風録

やさい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三国志疾風録

### 【Nコード】

N6479P

### 【作者名】

やさい

### 【あらすじ】

三国志をキャラ小説テイストにして読みやすくしています。

舞台は近未来という異次元三国志になっており、横文字が普通に闊歩してます。

バリバリの三国志原理主義者の方はご遠慮下さい柔軟な方で元気になりたい方にお勧めです！

他者の書いてる三国志より遥かに笑えます（当社比

喜2怒2哀1楽5な割合で書いてます。

物語をイメージしやすいようにイラストも公開してます。

レビューや栞を糧に生きてます。今はとても空腹で背中とお腹がくっつきそうです誰か助けて下さい

三国志という性質上、殺し合いが避けられませんので、そこいらは有ると覚悟して読んで下さい。

張飛が女だったり女人化してるキャラもありますが、性格は一部を除いて三国志のイメージ通りだと思います

三国志を知らない人にも楽しめるようにしていますので、これを読んで横山三国志↓光栄三国志↓吉川三国志↓やさい三国志の無限ループでフワフワウキウキ

## 龍虎街中で商いする（前書き）

戦乱に乗じる者として、大きくは群雄が挙げられ、小さくは利益を求める商人がある。

商人の中でも更に小さな者として店を持たない流れ商人という小さい話から始めます。

とはいえ扱う商品は国営のみ許された塩であり、流れ商人というより闇商人といった感じが始まります

## 龍虎街中で商いする

トラブルの気配を敏感に察知した露店商の何人かは店をたたむ中、商品だけを隠した三人組に五人組の男達が近づいた。

「その流れ商人、お前達は誰の許可を得て此处で商売してやがるんだ、ああ？」

長髯の大男と顔面に虎髭を模した刺青をした異相の大女が舌打ちした。

もう一人、まだ年端のいかぬ顔立ちをした少女が二人の後ろで齒軋りしながら眠っている。

「おい関羽、こいつら俺達に喧嘩売りにきたみたいだぜ。いくらで買うよ」

「やめとけ。役人相手だ高くつくぞ」

「ならいつそ、こつちから売るか。俺達商人は売りが基本だろ。転売できないぐらいにギタギタにしてやろうぜ兄弟」

「張飛。役人は仕事をしているだけだ。それに売り捌くまでは面倒事を起こすな」

二人がひそひそと話してるのが気に入らないのか、五人組の一人が唾を吐きながら怒声を上げた。

「何をごちゃごちゃ言ってるやがる！ どうやら痛い目見みたいようだなコラ！」

「何だゴロツキか」

「役人様だコラ。ここじゃ俺達の許可無しに商売できない。出すもん出せばすぐにでも許可書をくれてやるがな。いや舌じゃねーよ、そんなもん出されてもムカつくだけで笑えねえぞ大女。むしろ許可書代金が大幅アップしたぞコラ」

「何なら後ろで寝てる女を一晩貸すだけでも構わんが」

「ロリコン野郎が。生憎とこいつはアンドロイドだ」

「へたな嘘つくんじゃねえ。薄汚い商人風情がロストテクノロジーを所有してるわけないだろ。金出すか女を貸すか、お縄を頂戴するか選べや」

長髯の男が立ち上がった。役人達よりも頭二つ分は高い。

「客がきた。邪魔だ、どいてろ」

役人達の後ろに老婆が手に小袋を持ったまま、困ったように立ち尽くしていた。

「塩が安く買えると聞いたんじゃが……」

「塩だあ？ 塩の売買は禁じられてるぞババア」

人相が一番悪い役人が、老婆から小袋を強引に奪った。

「ちつ、しけてやるな。こいつで許してやるから失せろ」

「返しとくれ！　じい様が死ぬ前に塩を使った料理を食わせてやりたいですじゃ！」

「へっ、知るかよ。さっさとくたばれや」

小袋を高く掲げて老婆を蹴り倒した。

と、長髯が高い位置から小袋をさっと奪い返して懐に入れ、代わりに売り物として並んでいる袋を二つ老婆に手渡した。

「こいつは辛い砂糖だ。魚なんかにはよく合う」

拝むようにして立ち去る老婆に伸びた役人の手を長髯が締め上げた。途端、残りの役人が一斉に抜刀して囲む

「貴様等は老人を敬う事すらできんのか！」

「黙れ！　お前達は何を売ってやがるか！」

「てめえらみたいに油を売ってるわけじゃないぜ」

異相の女も拳を鳴らして立ち上がった。後ろの少女は死んだように眠ったままだ。

「俺達のどこが油問屋に見えるんだコラ。目が悪いのか大女」

「なんだそれ。お前は頭悪いのか？　それともわざとボケてるのか？　だとしたらスベってるぞ。油なだけにかなり滑ってるぞ小役人」

「やめておけ張飛。皮肉も通じん馬鹿を相手にしても仕方あるまい。お前の油にかけた表現も二十五点でとこだ。掘り下げる話題ではない」

「厳しい採点じゃねーか関羽」

「三十点満点でだ」

「そりやどーも。さて行くか。この村から出て行けばいいんだろ」  
「行かせるわきゃねーだろ！ 塩を売ったとなりや賊扱いだ。斬られても文句言わせねえ」

五人組の役人が一斉に抜刀して関羽と張飛を囲んだ。相手が丸腰と見て、狩りでも楽しむような雰囲気漂っている。

「おい大女、裸になって許しを乞えばお前だけは助けてやる。俺はでかい女が好みだからよ」

「そいつは光栄のキワミ、アッ——！」

張飛が役人の腹に掌底を打ち込んだ。捻りも加わり凄まじい勢いで吹き飛び、そのまま白目を剥いた。

「張飛！」

「すまん。女扱いされた上にセクハラときたら我慢できん」

「貴様等！ この場で公開処刑決定したぞ！」

「あん？ 俺と関羽殺るにゃー、後一億人足りねーぜ」

「ぬかせー！」

残りの四人が二人一組となって関羽と張飛に襲いかかるが、一瞬にして殴り倒された。戦闘というより運動でしかなかった。

「やるねお二人さん！」

周りから大歓声が上がった。日頃から多くの者が役人のやり方に不満を抱いていたのであろう。

「外道な役人は漢道を往くこの関羽が成敗いたした！ 安心して売買されるがよい。張飛、役人供には塩だ塩を撒いておけ！」

関羽は5人の役人を一人で担ぎ上げ、町人達に見せるかのように道の真ん中をゆっくりと歩き、往來の最も激しい通りに降ろして並べて吼え声を上げた。その行為にどんな意味があるかは連れの張飛にも判然としないが、町人は大喜びだった

「また伝説を作ってしまったようだ。ページ数を圧迫してしまうわい」

「その心配は無用だな。こいつは充電中で寝たままだ。記録してねーよ」

「ぬ、我等の伝説をプリントアウトするしな能のないガラクタめが。起きたら我が漢の道五人抜き編を聞かせねばならぬか」

「その程度で語るんじゃないよ。それより商売繁盛だぜ。早く捌いて次に行かなきゃ州兵を向けられるぜ」

関羽と張飛の塩屋は役人成敗の噂と安値が絡まり、日暮れ前には

完売した。二人はすぐに店をたたむと荷車に眠ったままの少女を乗せて町を後にした

## 不死身の男（前書き）

既に日が落ち始めている山中を往く荷車には、布で隠されている塩が再び満載になっている。密かに貯蔵している場所で積み込んでいた

## 不死身の男

塩だけでもかなりの重みがあるのだが、その上で横になっている張飛と少女の体重を加えてすら軽々と関羽が荷車を引いて進んでいく。

「おい」

「ああ」

張飛が身を起こして周囲を窺った。鳥の鳴き声一つしない。荷車が進む音に隠れて、風によるものか草木が擦れ合う音がわずかに聞こえるぐらいである。

「前に人だ。二人」

張飛が荷車から音も無く飛び降りると、いかにも山賊のような格好をした二人が動作だけで静止を促してきた。

近付いて見ると腕に黄色の布が巻かれている。最近流行りだした太平道を旨とする新興宗教員の証だ。

宗教の枠に留まらず、武装蜂起して国に反逆までしている独自勢力となっている。

「よし荷車を捨ててすぐに逃げろ。賊に囲まれてるぞ」

二人いる中でも年上で武骨な男が囁くように言った。もう一人の若い男は関羽の横にきて交代する的な仕草をした。暗くて確とは分からないが、頬に何か書いてある。

「賊はお主達であらう。命を捨てたくなければすぐに逃げるがいい」

そう言った関羽の顎髭を、若い方がいきなり引つ張り顔を己の目線に合わせた。瞬間、若者が殺されると張飛は確信した。

「例え貴様が神でも悪魔でも將軍でも髭魔神でも気軽に生殺与奪を語るんじゃないよ。誰もが生きる為に懸命なんだ。脅しだろうと本気だろうと命を安く語ってんじゃない！」

薄暗くなつた山中でも分かるぐらいに、関羽の顔が紅潮した。小刻みに震えてはいるが、それ以上は動かない動けない。性格上、正論で攻められると弱いのは知っているが、それを踏まえても張飛には不思議な光景に思えた。

「賊が偉そうに語るじゃないか。お前が絡んでる男は賊を喰らつて生きてる鬼人だぜ」

「女、私は賊なんかじゃねーから」

「だつたら何だよ」

「んんん、私に聞いているのか。この私が誰か聞いているのか女？

私は劉備間違えた馬休だ。馬鹿も休み休み言えで雑魚っぽいだろ。劉備つてのは違うから忘れろ」

「馬鹿も休み休みに言うがよい。劉姓なら王家の血筋ではないのか」

引つ張られていた髭を擦りながら言つた関羽の声が、僅かに震え

た。

「そりゃ私が言った台詞だろーが。オウムかてめえの前世はオウムかよ。っと、いけない。奴等の合図が聞こえるな。早く逃げた方が身の為だぜ。私が荷車を引いて囷になるから。周倉が道案内してくれるから早く逃げな」

周倉と言われた男が頷いた。されるがままに荷車を若者に託し、夢遊病者のようになっていく関羽の様子を見て、張飛は舌打ちをした。

「囷になったらお前が賊に殺されるぞ。賊の仲間じゃなければだよ」

「まーだ疑ってんのかよ。たかが二人、いや三人にんな面倒な事をするかよ。それに私には大志があるから、こんな場面で死なねーよ。剣を使わせても一騎当千とまではいかなくても当三ぐらいはいくぜパー！」

「百点！」

関羽の採点に、それは違うだろうと張飛は思ったが、そもそも論点が違うのでツッコミは入れなかった

「そいつは大事な商品だ。渡すわけにはいかないな」

「商人か。ならばタク県の樓桑村まで取りに来いよ。そこまで周倉に案内してもらいな。この山の抜け道にも精通してるし、賊からはうまく逃げれるはずだ。荷台の幼女は商品ってわけじゃないんだろ。こいつはさすがに預かれねえから何とかしろよ髭男爵」

関羽は承知とばかりに幼女をドサリと地面に降ろすした。

「あんたはどうするんだ。重い荷車を押しながらだと逃げ切れまい」

「この私に同じ事を二度と言わす気か？ 私は決め台詞を言うのは大好きだから何度でも言つてやるぜ。私は死なん！ 大望を果たすまでは死なん！ 故にこんな導入部で死なん！ 心配無用だ。むしろ周倉、死相が出てるぜ気を付けな。こいつはようやく見付けた仲間だからお前達が死んでも周倉は逃がせよ」

「承知した。漢同士の約束だ。あの満月に誓つて守る」

「いやいや三日月だぜ今夜は——大丈夫か髭？」

「ぬ、ならば漢らしくあの蛍のケツの光りに誓つ」

「普通に三日月か、せめて星だろ。無理に狙う必要ねーだろ。周倉、くれぐれも気を付けなよ。どうやら普通の商人じゃなさそーだぜ」

「普通じゃないのは見れば分かるだろ。それに黄巾にいる間は俺の名前も馬鉄つて言う約束だろ」

「悪い悪い周倉、俺は先に行くから賊を巻いたら家に来な。ママに紹介するからよ」

「勝手に話が進めてんじゃねーよ。俺達は賊相手に逃げるなんてもつたない事はしないし、その荷車をお前一人で引けるとも思え

ねーな。俺や関羽ですら二時間毎に交代しなきゃ息がきれる」

張飛は身を屈めて若者の目線に近づきニヤリとした。

「普通に押せたらキスしてやるぜ」

若者は腕にぐつと力を込めると、空車でも引くかのように前進した。空車ではないと訴えるように荷車からぎしぎしと重低音が響いた。

「かかかか！ 俺の名前は馬休だぜ。荷車引く為に生まれたよ  
うなもんよ！ いや待て待てあんまりかつこよくねー台詞だな。大  
女に喰われたくねーから、このまま行くぜ！ 賊が俺に絡んでるす  
きに逃げろよ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6479p/>

---

三国志疾風録

2011年1月9日01時45分発行